

コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトス 『帝国統治論』第9章：研究動向と訳註

居阪僚子、村田光司、仲田公輔

1、はじめに⁽¹⁾

ビザンツ帝国皇帝コンスタンティノス7世ポルフィロゲネトス（在位945-959年⁽²⁾）は、おそらく950年代の初頭に、息子であるロマノス2世に向けてひとまとまりの作品を編纂した。冒頭に『コンスタンティノス、永遠なる皇帝、キリストの名においてローマ人の皇帝から、その子ロマノス、神に戴冠されし緋室生まれの皇帝へ』と題されたこの作品は、17世紀に出版された最初の刊本に付された題名を踏襲し、今日では『帝国統治論（*De administrando imperio*）』の名で知られている（以下の行論では基本的にDAIと略す）。全53章からなるこの書物は、10世紀当時においてビザンツ宮廷が知り得ていた帝国の内外の世界についての叙述である。その範囲は、北はハンガリーやクロアチア、セルビア、ブルガール、ペチェネグ、ルーシそしてハザール、西はイタリア、フランク、スペイン、南はアフリカ、東はイスラーム世界やアルメニアなど、およそビザンツ帝国となんらかの関わりを持ったほぼすべての地域に及んでいる。

この史料はビザンツ帝国研究の史料としてはもちろん、周辺地域、とりわけ文字による証言をあまり残さなかったハザールやペチェネグを初めとする集団の研究にとっても疑いようなない価値を持っている。それゆえ本作品は、ビザンツ史家はもとよりその隣接領域を研究する人々に対して積極的に紹介され、議論されるのが相応しい。現在われわれはDAI全体の日本語訳と註釈を準備中であり、その際出来る限り隣接領域の専門家を意識してビザンツ史に関する基礎的な情報の解説も盛り込むことを企図している。

作品全体についての詳細な解説は別稿に譲り、本稿ではわれわれの計画の紹介を兼ねて、ルーシを扱う第9章をめぐる近年の研究動向を概観し、次いで現段階での試訳と訳註を付す。あえて第9章のみを切り出して発表するのは、DAIの中でもとりわけこの章に関する研究が盛んであり、その動向を追うのにまとまった叙述が必要であると考えたからである。とはいえわれわれ執筆者はいずれも古代ロシア史を第一に専門とするわけではないので、万全を期した紹介とはならない。皆様からの幅広い批判・訂正を請い、本作品のより良い理解を共有することができればと願っている。

本稿では翻訳の底本として、Gy・モラフチクが校訂し現在スタンダードとなっている刊本を用いる（下記「4. 参考文献一覧」、略号DAIを参照）。

彼の採用した読みから離れる際はその都度注で言及した。本稿の担当について付言しておく。「1. はじめに」と「2. 研究動向(1)、(2)」までを村田が、「2. 研究動向(3)、(4)」は仲田が執筆し、全員で内容を検討した。とりわけ(4)は居阪の貢献が大きい。第9章の日本語訳は居阪、村田、仲田の3名で作成し、訳註については注番号19-45を仲田が、注番号46-100を村田が執筆し、3名で相互に補足を行った。

2. 『帝国統治論』第9章に関する研究動向

今日の研究者らの多くは、DAI全53章のうち第1章から第13章までを1つのセクションと見なしている。このセクションは帝国北方の諸集団に対する外交指南の体裁をとり、第1-8章まではペチェネグについて、第10-13章はハザールやテュルク系集団について、帝国と彼らとの関係、彼ら相互の関係、そして重要な地理的情報などの話題が記述される。

第9章はペチェネグを扱う第1-8章に続いて配置され、一般的に次の3つの下位区分から成り立つとされる。(A) 3-104行目ではロシアの各地から丸木船をキエフに集め、そこからルーシたちによるビザンツ帝国領への旅路、とりわけドニエプル川の早瀬下りが詳述される。(B) 104-113行目では冬の期間におけるルーシたちの徴貢の習慣について簡単に記され、最後の(C) 114行目において「ウゾイ」と呼ばれる集団についての記述が配置される。本章の少なくとも(A)の部分については944年前後に最初の執筆がなされ、952年にコンスタンティノス7世が全体を纏める際に、(B)との整合性を確保する作業を含め、全体に幾分の改訂が為されたと想定されている[Obolensky 1962, pp. 18-20]。

第9章は10世紀のルーシに関する最も詳細な同時代史料として、19世紀以来今日に至るまで、DAIの中でも特に多くの研究が捧げられてきた箇所である。とりわけ1962年にD・オボレンスキーが自身のものを含めた既存の研究をまとめ上げて執筆した第9章の註釈は、今日でも第一に参照されるべきものである[Obolensky 1962]⁽³⁾。日本語でも1983年に、彼の註釈に拠りつつ山口巖が第9章の日本語訳を発表している[山口1983]⁽⁴⁾。しかしながらオボレンスキーの註釈が出てから既に半世紀以上が経過し、彼の示した見解のうち乗り越えられている箇所、再考が必要な箇所も出てきている。ここではとりわけ議論が戦わされてきた問題点、すなわち第9章の情報源、DAIに占めるその位置づけ、そして第9章に現れる「ロス(ルーシ)」の性格に焦点を絞ってオボレンスキー以降の研究史を紹介したい⁽⁵⁾。

(1) 第9章の情報提供者

ルーシのビザンツ行を記す(A)、および彼らの冬の生活を記す(B)は、内容や叙述のスタイルもさることながら、同一の集団名や地名について異なる転写方法を採用している。これらの事実を根拠に、(A)と(B)が異なる

情報源に由来することは早くから主張されていた。

(B) は (A) に比べてスラヴ系集団の名称を正確に音写しているほか、「ポリュージェ(巡回徴貢)」に代表される古東スラヴ語も用いている。この箇所がどのような編集過程を経たのかは今なお定かではないものの、最初の情報提供者は古東スラヴ語の知識を持ち、かつスラヴ系の語彙を日常的に用いる環境にあった人物であった可能性が高い [Obolensky 1962, p. 19; Mel'nikova 2016, pp. 320-321]。

(A) の情報源については、すでにオボレンスキーが幾つかの証拠を挙げて立ち入った議論を展開している。彼は (A) において「第1の早瀬」がコンスタンティノープルのポロ競技場と比較され、またドニエプル下流の「クラリオンの浅瀬」が競馬場の幅と対照されていることから、情報提供者がコンスタンティノープル出身者と述べる。そして詳細な旅程の記述や、その一方でルーシの運ぶ商品への関心の薄さから判断して、その人物がビザンツからキエフへと派遣された外交使節の1人ではなかったかとオボレンスキーは結論づけている。

この見解はその後広く受け入れられてきたようであるが、最近の論文で E・メリニコワは (A) が少なくとも3つの異なる資料ないし情報源から構成されていると主張している。彼女によればまず第9章3-24行目、ビザンツ行きの船の収集と準備の記述は、丸木船に関する深い知識などに照らしてルーシが情報源と判断できる。また24-79行目に述べられるヴィタチョフからドニエプル河口までの旅程では先述したようにコンスタンティノープルの建築物が参照されることがあるが、一方でこの箇所での比較的正確な古東スラヴ語と古スウェーデン語の名前などから判断するならば、この箇所の情報提供者はオボレンスキーの言うビザンツ人使者というよりはコンスタンティノープルをよく知るルーシである。そして最後に80-104行目の聖アイテリオスの島からビザンツ領メセンブリアまでの記述はこれまでとは明らかに異なり、停泊地や滞在期間、ルート状況についての情報を含んでおり、沿岸航路の古代・中世的記述(περίπλους)の作法に則ったものである [Mel'nikova 2016, pp. 321-322]。

メリニコワの主張はオボレンスキー説への決定的な反証とはなっておらず、(A) の情報提供者がルーシであるかビザンツ人であるかはにはわかには断定しがたい。しかしながら (A) 内部における記述方法や重点の置き方の違いを指摘した点で彼女の議論には大きな価値が認められる。そしてこの話題に関してメリニコワが参照していない重要な研究として、歴史言語学者の E・メリンが2003年に発表した2編の論文を挙げておかねばならない。メリンは第9章に現れるキエフ周辺の街々とドニエプル早瀬の名前を全面的に再検討し、結果としてそれらの語源の多くを修正し、とりわけ DAI が早瀬の名前として挙げる「スクラベニア」の言葉が古東スラヴ語というよりはむしろ南スラヴ語、すなわち古代教会スラヴ語であることを強調した。さらに注目すべき事に彼女は、DAI に書かれるそれらの地名のギリシア語形にポ

ントス方言の影響が見られると述べている。彼女はそれらの情報提供者が、古代教会スラヴ語に親しみ(とりわけ『詩編』のスラヴ語訳。下記註56を参照)、一方で古北欧語やギリシア語ポントス方言の話される境界地帯に居た人物(スラヴ系?)であったと推測している[Melin 2003a; Melin 2003b]。

メリンの研究を踏まえたうえで改めてメリニコワの議論を振り返るならば、さしあたり第9章の早瀬下りまでの箇所(3-79行目)に関する情報提供者は、1人か複数かはなお不明なもののビザンツ帝国内で生まれ育った人物ではない可能性が高まる。その一方で80-104行目の黒海沿岸行の情報源については、なお態度を保留せねばならない。いずれにせよ第9章で詳述される情報の密度や正確さ[Cf. Androshchuk 2013, pp. 117-125]、そして包括性に鑑みるならば、情報提供者は偶々知りえた知識を開陳したというよりは、むしろビザンツ宮廷に依頼されて調査を行ったと考えるべきかもしれない。我々は同時代に帝国が各地にスパイを放っていたことを知っており⁽⁶⁾、彼らは当然のことながらその出自や言語能力などを考慮して雇用されていたであろう。情報源に関する今後の研究は、歴史言語学的アプローチに基づく情報提供者の言語能力・出自を追求する方法と並行して、その人物がいかなる経緯で、あるいは役割においてビザンツ宮廷に情報を提供するに至ったのかという観点からの検討も必要であろう。

(2) 第9章の位置づけ

DAI第1-8章および第10-13章に比べて第9章が与える一見して異質な内容は、その位置づけについて多くの議論を呼んできた。古くは第9章が本来DAIの別の箇所(第14-46章)にあったとする主張も見られたが、この見解はオボレンスキーらによって否定されている。オボレンスキーは第9章の特に(B)において著者による編集の痕跡を認め、この章がDAIにおいて著者の意図通りに配置されていることを論証した。しかしながら第9章自体の内容がDAI第一部(第1-13章)の中で異質であるという理解は、オボレンスキー以降も共有されてきた。すなわち第9章は地誌的な情報やルーシの交易遠征の記述を主とする、(他の章での事務的な語りとは対照的な)叙事的な語りであるとする理解である[Obolensky 1962, pp. 18-20]。

こうした見解に対しても、メリニコワが疑問を呈している。彼女は第9章において注目すべきは語りの在り方ではなく、そこで提供される情報の要であると主張した。つまり、ルーシがどこでどのようにビザンツ行きの船を調達・儀装し、道中どのような困難にあうのか、そしてどこで彼らが交易用の商品を購入するのか、こうした情報はビザンツの対ルーシ戦略上重要な意味を持っており、その点で第9章の目的は第1-8章のそれと同一であると彼女は言うのである⁽⁷⁾。例えば972年にブルガリア遠征からの帰途にあったスヴャトスラフがドニエプルの「早瀬」を通過した際、ペチェネグによる襲撃を受けたことが『原初年代記』に記されているが、メリニコワはビザンツがペチェネグに襲撃し易い地点を教えたのではないかと疑っている。

つまりビザンツはルーシの弱点を DAI 第9章その他の情報によって熟知し⁽⁸⁾、帝国を脅かす諸集団に対する干渉戦略に利用していたということである [Mel'nikova 2016, pp. 318-322]⁽⁹⁾。彼女の主張は十分な論証を伴ったものではないが、第9章を DAI 第1部の論理構成の一部と捉える解釈を提示した点で注目すべきものである。今後の研究は、彼女の見解を踏まえたいうで進められねばならないだろう。

一方で第9章(C)として区分されている114行目、「ウゾイはパツィナキタイを攻撃することができる」に関しては、ほとんどの研究者が一貫してその歪さを指摘し、この部分が第9章ではなく、ウゾイとハザールを扱う次の第10章冒頭にもともと置かれていたと説明してきた。だがT・ルンギスは、この一文がむしろ第9章と第10章の橋渡しをする役割を担っている(つまりこの文章の位置は編纂者の意図どおりである)と解釈し、テキストの移動に反対している [Λουγγής 1990, σ. 111; Λουγγής 1994, σ. 307]。彼の見解を積極的に肯定、ないし否定する材料は残念ながら見あたらないが、上述のメリニコワの見解とあわせ、総じて近年の研究は第9章のテキスト構成が著者の意図通りであることを主張する傾向にあると言えよう。

(3) 第9章におけるルーシ

DAIに登場するギリシア語「ロス(Ρῶς)」は、『原初年代記』等に現れるのと同じ、スラヴ語の「ルーシ(Rus', Русь)」に由来しているとされる⁽¹⁰⁾。この語は様々な意味を持ちえたが、オボレンスキーは10-12世紀の用法を、以下のようにまとめている。即ち、(1) いわゆるキエフ・ルーシの成立に際して重要な役割を担った、スカンディナヴィア人を指す民族的な用語、(2) キエフ・ルーシが支配し、東スラヴ人が居住する地域全体を指す地理的用語、(3) 他の東スラヴの地域と区別し、ドニエプル中流、あるいはその近辺の南ロシアの地を指す、地理的用語である⁽¹¹⁾。オボレンスキーによれば、その意味に加えて、語源、民族的起源、いわゆるキエフ・ルーシ国家の成立に際して果たした役割といった、様々な側面について議論がかわされてきた [Obolensky 1962, pp. 20-23]。しかしながら、特にスカンディナヴィア人とルーシの関係については、様々な異論が提示され、研究者たちの見解は今日に至るまで一致を見ていない。これについて特に問題となるのが、ルーシ起源についての、ノルマン起源説と反ノルマン起源説の間での論争である。18世紀に端を発するこの論争は、時折民族主義や政治情勢にも影響され、激しく議論が交わされた。大まかにまとめるとすれば、前者を支持する「ノルマニスト」と称される研究者は、『原初年代記』に現れるヴァリャーグ招致伝説と照らし合わせ、ルーシがスカンディナヴィア由来であるとしつつ、彼らがドニエプル中流域での最初の統一政体の形成において重要な役割を果たしたとしている。対して後者、即ち「反ノルマニスト」らは、国家的統合におけるノルマン人の役割を否定(ないしは軽視)し、それ以前に統合がなされていたと主張する。その際にルーシの民族的由来については、アラン、フィ

ン、ハザール、リトアニア、スラヴなど様々な説が提唱されているが、とりわけ民族主義の立場から、土着スラヴ人の役割を強調する説が、ロシアを中心に広がっていた。なお、「ルーシ」の語の言語学的な説明について、「ノルマニスト」側は専らルーシの語は古スウェーデン語「rōper (フィンランド語とエストニア語でそれぞれスウェーデン人を指す Ruotsi, Rotsi の原型)」あるいはそれに類する語が、古フィン語の「*Rotsi」を経由して入ったものだとしている。対して「反ノルマニスト」の立場からは、ドニエプルの支流ロシ川の名などが、ルーシの由来の候補として挙げられている [Obolensky 1962, pp. 20-23; 清水 1995, 31-39 頁; 栗生沢 2015, 60-61, 65, 89-110, 114-116 (註 17, 18), 121 (註 35) 頁]。

近年、多くの研究者はキエフ・ルーシ国家成立に際してのスカンディナヴィア人の寄与を多かれ少なかれ認めている。ルーシの外で作成されたギリシア語やラテン語の史料も、概してノルマン説との親和性が高いとされており [清水 1995, 31 頁; 栗生沢 2015, 65-77 頁]、DAI 第 9 章の記述全般についても、ルーシとスラヴ人を区別していること、ドニエプルの早瀬をルーシとスラヴの両言語で併記していることなどから、ルーシがスラヴとは異なるノルマン人由来の人々を指す根拠の 1 つとして度々言及されてきた [Obolensky 1962, p. 22; 清水 1995, 31 頁]。しかしながら、キエフ・ルーシの諸国家がヴェリヤグの到来によって唐突に現れたわけではなく、その下地にはスラヴ人たちの築いた社会的・経済的基礎があったことは、ノルマン起源説を支持するオボレンスキーなども指摘するところである [Obolensky 1962, p. 23; Cf. 小澤 2015, 122-123 頁]。栗生沢猛夫も、もはやノルマン論争においては、単純にスラヴかノルマンかという二元論は有効ではなく、ノルマン人の関与を認めた上で、その関与のあり方について議論する研究が登場しつつあると述べている⁽¹²⁾。上述のようにノルマン説の重要な根拠として度々言及されてきた DAI 第 9 章についても、情報提供者の複数言語使用、スラヴ語による都市名表記、そしてルーシ達によるスラヴ語の使用(「ポリュージェ(巡回徴貢)」等)といった要素から、進展しつつあったルーシのスラヴ化、両者の混淆の証左を読み取る見解も提示されている [Sorlin 2000, pp. 353-354]。

(4) 「ロシア」「ロスたちの地」「ロシアの地」「外ロシア」

第 9 章の記述の中でもっとも注目を集めた問題の 1 つが、ルーシたちの地理的領域を指すコンスタンティノス 7 世の用語法である。「ロシア(Ρωσία)」は同時代のビザンツにおいて「ロスたちの地」たちを指す語である [De. Cer., pp. 594/18, 691/1; Obolensky 1962, p. 20; ODB, vol. III, p. 1794, s.v. Rhosia]。ギリシア語では 10 世紀から使用されているものの、同様の語が現地の人々による自称として用いられるようになるのは、15 世紀以降である [栗生沢 2015, 36 (註 1) 頁]⁽¹³⁾。DAI 第 9 章以外も含め、「ルーシたちの地(χώρα τῶν Ρῶς)」「ロシアの地(χώρα τῆς Ρωσίας)」という表現も用いられている [DAI, 4. 1, 37.1.]。これに関連して、もっとも研究者の間での論争

を喚起したのが、第9章に現れる「外ロシア (ἔξω Ῥωσία)」という独特の用語である。従来、多くの研究者はこれに対応する「内ロシア (ἔσω Ῥωσία)」の存在を想定した議論を提示してきた[清水 1995, 56 (註11) 頁]。オボレンスキーは、20世紀前半までに提示されてきた諸解釈は、2通りに大別できるとしている。すなわち、①コンスタンティノス7世から見て、キエフを取り巻く領域全て。オボレンスキーはギリシア語のシntaxs的には妥当だが、「内ロシア」となるべき領域が狭すぎることに、チェルニゴフやペレヤスラヴリが「外ロシア」となるとは考えにくいことなどが難点だとしている。②ノヴゴロドとその周辺。この説は文法上の困難を伴うものの、キエフやコンスタンティノープルから見た「外」を指す領域としても適当だとしており、オボレンスキー自身も、こちらに近い見解を示している [Obolensky 1962, p. 28; КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 308-310]⁽¹⁴⁾。その後提唱された説のいくつかを紹介すると、O・プリツァクは、「内ロシア」と「外ロシア」は2つの商業ルート、即ちノヴゴロドーキエフーコンスタンティノープルと、ノヴゴロドーキエフーヴォルガ・ブルガールのそれに対応すると考えた。そして「内ロシア」はルーシの諸侯にとっての「内」である前者、即ちドニエプルの商業ルートを指すとする一方で、「外ロシア」はルーシ・カガン国の故地でもあるロストフ地方だとした [Pritsak 1983]⁽¹⁵⁾。J・バチッチは「外ロシア」はビザンツにとっての「外」、即ち黒海付近の「内ロシア」に対して更に遠方のルーシたちの領域を指すとしている [Vačić 1995]。その他にも、外ロシアを北のルーシ即ちスモレンスクとノヴゴロドの間の境界領域とする見解があり、内ロシアについても、ポリャーネの土地、あるいは狭義のルーシ(キエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリ)とする説もあったが、メリニコワとペトルヒンは否定的である [КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 308-309]。

しかし他方では、ルーシと貢納スラヴ人の関係に照らし合わせ、ルーシたちの領域を「ロシア」、貢納スラヴ人たちの領域を「外ロシア」とする見解も存在する。DAIの「ロシア」については、P・M・プリシオルコフやA・ナソノフはこのギリシアでルーシの地を指す言葉を、ルーシ側の「ルーシの地(ルースカヤ・ゼムリャー)」の語の用法と関連付けて考え、プリシオルコフは「ポリュージュ(巡回徴貢)」の適用外となる範囲、ナソノフは後代の用法を参考に、キエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリといった、ルーシの中核をなす範囲を指す言葉だとした [Присёлков 1941; Насонов 1951]⁽¹⁶⁾。S・プロキエは「ロシア」についてのナソノフの見解を引用しつつ、それに対応する「外ロシア」は、貢納者であるスラヴ人の領域だとしている。というのも、『原初年代記』をはじめとするルーシの歴史叙述では、基本的にキエフ、チェルニゴフ、ペレヤスラヴリに囲まれた地域がルーシの地とされており、他方でノヴゴロドなどのスラヴ人たちは、ルーシの一部だが、ルーシの地には属しないとされる。ノヴゴロドで作成された年代記においても、自分たちをルーシやルーシの地に属するものと表現することはないという [Plokhy 2006, pp. 38-41]⁽¹⁷⁾。メリニコワも、「ロシア」がルーシが住む地で

あり、限定的な地域であり、他方でおそらくはスラヴ人たちの領域が「外ロシア」であるとしている [Mel'nikova 2016, p. 325]。I・ソーランは、DAI における「ロシアの地」の地理的範囲は、ルーシ君主の統治範囲ではあるものの、ドニエプル右岸のより限定的な領域であるとした。彼女はチェルニゴフやペレヤスラヴリについては、前者は DAI の記述からロシアの中心から除外されていると解釈し、後者については、10 世紀当時はまだ都市を形成していないとしている。しかしいずれにせよ、この「ロシア」がルーシたちの中核を指すという解釈に照らし合わせ、「外ロシア」はルーシに従属するスラヴ人諸集団の地域だとするのがもっとも妥当だとしている。さらにソーランは明確に、そもそも「内ロシア」の存在を想定する必要性を否定している [Sorlin 2000, pp. 344-349]⁽¹⁸⁾。なお、これらの見解においても、「外ロシア」は必然的にノヴゴロド等の北方の領域を指すことになる。

3. 本文

第9章 ロシアより丸木船⁽¹⁹⁾にてコンスタンティヌポリスに来るロス⁽²⁰⁾について⁽²¹⁾

[次のことを知るべし。] 外ロシア⁽²²⁾からコンスタンティヌポリスへ下ってくる丸木船は、一方はネモガルダス⁽²³⁾からのものであり、そこにはロシアの首長⁽²⁴⁾インゴル⁽²⁵⁾の息子スフェンドストラボス⁽²⁶⁾が座していた。他方はミリニスカの街⁽²⁷⁾、テリウツァ⁽²⁸⁾、ツェルニゴガ⁽²⁹⁾、ブセグラデ⁽³⁰⁾からのものである。それらは全てダナプリス川⁽³¹⁾を下ってくるのであり、サンバタスと呼ばれるキオアバ⁽³²⁾の街で合流する。彼らの貢納者⁽³³⁾であるスクラボイ、すなわちいわゆるクリベタイエノイ⁽³⁴⁾、そしてレンザネノイ⁽³⁵⁾や、残りのスクラベニアの人々⁽³⁶⁾は、彼らの山で冬の時分に丸木船を切り出す⁽³⁷⁾。そしてそれらを加工し、氷が溶ける季節になると、それらを近くの湖沼⁽³⁸⁾へと運びこむ。そしてそれら〔湖沼〕はダナプリス川へと流れ込んでいるので、彼らはそこから同河川へと入り、キオバ⁽³⁹⁾へ行って、艀装するところへ引いていき、それらをロスに売る。ロスたちはこれら船体のみを購入し、彼らの古い丸木船を解体⁽⁴⁰⁾して、それらから櫂や櫂座や他の備品をそれら〔船体〕に取り付け⁽⁴¹⁾、〈…そのようにして〉⁽⁴²⁾それらを艀装する⁽⁴³⁾。そして6月にダナプリス川を出発し⁽⁴⁴⁾、ロスに貢納する街であるピテツェベ⁽⁴⁵⁾まで下り、彼らはそこに2、3日のあいだに集合し、そして全ての丸木船が集められたら、彼らは出発し、先述したダナプリス川を下る。そして最初に第1の早瀬に至るが、それはエッスベと呼ばれ、ロシアとスクラベニアの言葉で「眠るな」を意味する⁽⁴⁶⁾。この早瀬は狭く、ちょうどポロ競技場の幅ほどである⁽⁴⁷⁾。その中心には根をはった高峻な岩があり、島のように姿を見せている。そこに向かってくる水が、それゆえに吹き上がり、下流側に強く打ち付けられ、大きく恐ろしい騒音を作り出す。それゆえロスたちはあえてその真中を通り抜けるようなことはせず、陸地に近づいて

着岸し⁽⁴⁸⁾、人々を降ろし、他の積荷⁽⁴⁹⁾を丸木船に残しておき、次いで身軽になり、石に当たらないように彼らの足で探りつつ〈…〉⁽⁵⁰⁾、このことをあるものは船首で、あるものは舷側で行い、あるものは船尾にあって棹を進める。そしてこの周到な注意深さをもって、川縁の岸辺を通過して第1の早瀬を通り抜けるのである。この早瀬を通り抜けると、再び陸地から残りの者たち載せて漕ぎ出し、別の早瀬まで下ろすのだが、そこはロシアの言葉でウルボルシ⁽⁵¹⁾、スクラベニアの言葉でオストロブニブラクと呼ばれ⁽⁵²⁾、「早瀬の小島」を意味する⁽⁵³⁾。ここもまた第1のものと同様に危険で通行困難である。彼らは再び先程と同様に人々を降ろして丸木船を運ぶ。同様にして第3の早瀬を通過するが、そこはゲランドリと呼ばれ、スクラベニアの言葉で「早瀬の騒音」を意味する⁽⁵⁴⁾。次いで第4の大きな早瀬、これはロシアの言葉でアエイフォルと呼ばれ⁽⁵⁵⁾、スクラベニアの言葉でネアセトと呼ばれる。なぜならその早瀬の岩場にペリカンが潜むからである⁽⁵⁶⁾。この早瀬においては舳先を前に全て〔丸木船〕を陸に上げ、それらの見張りをを行うことを命じられた者達が進み出る。そして彼らが発し、パツィナキタイに備えて不寝番を行う。残りの者たち、丸木船に積んでいた積荷⁽⁵⁷⁾を持ち出し、鎖で繋がれた奴隷⁽⁵⁸⁾がそれら〔丸木船〕を、6ミリオン⁽⁵⁹⁾、その早瀬を抜けるまで運ぶ。次いでこのようにして、引きずるなり、あるいは肩に担ぐなりして、彼らの丸木船をその早瀬の向こう側へと運んでいく。そうして、それら〔丸木船〕を川に浮かべて、彼らの荷物⁽⁶⁰⁾を積み込み、乗り込んで再び漕ぎ出す。それから第5の早瀬にたどり着くが、そこはロシアの言葉でバルフォロスと呼ばれ⁽⁶¹⁾、スクラベニアの言葉ではブルネブラクと⁽⁶²⁾、大きな湖をなしているためにそう呼ばれている⁽⁶³⁾。再び第1・第2の早瀬と同様に川縁へと彼らの丸木船を運ぶ。第6の早瀬に至ると、そこはロシアの言葉でレアンティ⁽⁶⁴⁾、スクラベニアの言葉でベルツェと呼ばれ⁽⁶⁵⁾、「水のたぎり」のことである⁽⁶⁶⁾。彼らはそれを同様にして通り抜ける。そこから第7の早瀬へと漕ぎ出す。そこはロシアの言葉でストルクン⁽⁶⁷⁾、スクラベニアの言葉ではナプレゼと呼ばれ⁽⁶⁸⁾、「小さな早瀬」を意味する⁽⁶⁹⁾。そうして彼らはクラリオン⁽⁷⁰⁾の浅瀬と呼ばれるところに進む⁽⁷⁰⁾。その地はロシアからケルソニタイが、そしてパツィナキタイがケルソンへと渡るところである⁽⁷¹⁾。この浅瀬は競馬場ほどの幅で⁽⁷²⁾、下からの高さは水底が顔を出すほどで、こちらからあちらは弓で射る矢が届くほどである⁽⁷³⁾。そのため、この場所をパツィナキタイが渡り、ロスを攻撃する⁽⁷⁴⁾。この場所を通過したあと、彼らは聖グレゴリオスと呼ばれる島に至る⁽⁷⁵⁾。その島で彼らは供犠を催すが、それはかの地に巨大な樫の木が立っているからである。彼らは生きた雄鶏を捧げ、さらに円状に矢を突き立て、加えて他の人々もパンや肉、また各々の持ち物から、〔捧げる〕。〔これらは〕彼らの習慣が定めるところである。さらに雄鶏については、それらを屠殺するか、食べるか、生きたままにしておくか、籤で決める⁽⁷⁶⁾。この小島からセリナス川に達するまでは、ロスはパツィナキタイを怖れない⁽⁷⁷⁾。つまりそこから出発した彼らは、河口をなす湖に

着くまで4日間航行するが、聖アイテリオスの島もまたそこにある⁽⁷⁸⁾。こうしてこの島に着くと、彼らはそこで2、3日身体を休める。そして再び彼らの丸木船に、不足分がないように、持ってきておいた索具や帆や舵を備え付ける。この湖は上述のようにこの川の河口であり、海までつながり、聖アイテリオスの島もその海上に横たわっているので、彼らはそこからダナストリス川⁽⁷⁹⁾へと出発し、無事到着するとそこで再び休息をとる。天候が好ましくなると陸を離れて、アスプロスと呼ばれる川⁽⁸⁰⁾にやってきて、またそこで同様に休息し、再び出発してセリナスへ、すなわちダヌビオス川の支流⁽⁸¹⁾と呼ばれるところに至る。さて、セリナス川を抜けるまでは、パツィナキタイは彼らに並走する。仮に海が丸木船の1隻を陸地に打ち上げてしまった場合には、全員が上陸してパツィナキタイに向けて団結して臨戦態勢を取る。だがセリナスを抜けると何も怖れるものはなく、ブルガリアの地に入り、ダヌビオス川の河口へとやって来る⁽⁸²⁾。ダヌビオスからはコノパス⁽⁸³⁾に至り、コノパスからはコンスタンティア⁽⁸⁴⁾へ、〔コンスタンティアからは〕バルナ⁽⁸⁵⁾の川へ、そしてバルナからはディツィナ川⁽⁸⁶⁾へ至るが、これらは全てブルガリアの地である。ディツィナからはメセンブリア⁽⁸⁷⁾の地域へとたどり着き、ここに至ってあまりにも痛ましく、恐怖に取り巻かれた、困難かつ厳しい彼らの船旅は終わりを告げる⁽⁸⁸⁾。ところでこの同じロスの冬の厳しい暮らしぶりは次のとおりである⁽⁸⁹⁾。11月に入ると、ただちに彼らの首長たちは全ロスともどもキアボス⁽⁹⁰⁾を離れ、「巡回⁽⁹¹⁾」を意味するポリュディアに出る⁽⁹²⁾。その行き先はすなわちスクラベニアのバルビアノイ⁽⁹³⁾、ドゥルグピタイ⁽⁹⁴⁾、クリビツォイ⁽⁹⁵⁾、セベリオイ⁽⁹⁶⁾、及びその他のスクラボイのところである⁽⁹⁷⁾。彼らはロスの貢納者である。冬の間ずっとそこで給養され⁽⁹⁸⁾、ダナプリス川の氷が溶けると、再び4月からキアボスへと戻る。ついで、既に述べたように彼らの丸木船を受け取って艀装し、ロマニア⁽⁹⁹⁾へと下るのである。

〔次のことを知るべし。〕ウゾイはパツィナキタイを攻撃することができる⁽¹⁰⁰⁾。

4. 参考文献一覧（主としてコメンタリー刊行以後のもの）

略号

BMT = *Three Byzantine Military Treatises*, ed. G. T. Dennis, Washington, D.C. 1985.

DAI = Constantine Porphyrogenitus, *De administrando imperio*, ed. by Gy. Moravcsik, trans. by R. J. H. Jenkins, rev. ed., Washington, D.C. 1967.

De Cer. = *Constantini Porphyrogeniti Imperatoris De Cerimoniis Aulae Byzantinae*, ed. J. J. Reiske, 2 vols, Bonn 1829-30; Constantine Porphyrogenetos, *The Book of Ceremonies; with Greek edition of the Corpus Scriptorum Historiae Byzantinae (Bonn, 1829)*, trans. A. Moffatt & M. Tall, Canberra 2012.

『原初年代記』= 國本哲男、山口巖、中条直樹（訳者代表）『ロシア原初年代記』名古屋大学出版会、1987。

LBG = *Lexikon zur byzantinischen Gräzität*, ed. E. Trapp, Wien 1994-

КБ = Константин Багрянородный, *Об управлении империей*, Под ред. Г. Г. Литаврина и А. П. Новосельцева, 2-е и исправ. изд., Москва 1991 [略号の後ろに () で括って註の著者名を記した].

ODB = *Oxford Dictionary of Byzantium*, ed. A. P. Kazhdan, 3 vols., New York - Oxford 1991.

Taktika = Leo VI, *Taktika*, ed. and trans. G. T. Dennis, Washington, D.C. 2010; rev. ed. by J. Haldon, 2014.

研究文献

F. Androschuk 2013, *Vikings in the East: Essays on Contacts along the Road to Byzantium (800–1100)*, Uppsala.

J. Bačić 1995, *Red Sea - Black Russia. Prolegomena to the History of North Central Eurasia in Antiquity and the Middle Ages*, New York.

K. Belke & P. Soustal 1995, *Die Byzantiner und ihre Nachbarn: Die De administrando imperio genannte Lehrschrift des Kaisers Konstantinos Porphyrogenetos für seinen Sohn Romanos*, Wien.

M. В. Бибиков 2003, “Византийские источники” в кн.: Е.А. Мельникова (ред.), *Древняя Русь в свете зарубежных источников: Учеб. пособие для студентов вузов*, Москва, стр. 69-168.

M. В. Бибиков, Е. А. Мельникова & В. Я. Петрухин 2000, “Ранние этапы русско-византийских отношений в свете исторической ономастики,” *Византийский временник* 59, стр. 35-39.

V. Binder 2000, *Sprachkontakt und Diglossie: Lateinische Wörter im Griechischen als Quellen für die lateinische Sprachgeschichte und das Vulgärlatein*, Hamburg.

R. ブラウニング (金原保夫訳) 1995, 『ビザンツ帝国とブルガリア』東海大学出版会 (R. Browning, *Byzantium and Bulgaria: A Comparative Study across the Early Medieval Frontier*, London 1975)。

J. B. Bury 1906, “The Treatise *De Administrando Imperio*,” *Byzantinische Zeitschrift* 15, pp. 517-77.

A. Danylenko 2001, “The Names of the Dnieper Rapids in Constantine Porphyrogenitus Revisited: An Attempt at Linguistic Attribution,” *Die Welt der Slawen* 46, pp. 43-62.

A. Danylenko 2004, “The Name “Rus” in Search of a New Dimension,” *Jahrbuch für Geschichte Osteuropas, neue Folge* 52/1, pp. 1-32.

F. Dölger 1953, *Byzanz und die europäische Staatenwelt*, Ettal.

A. Ducellier 1980, “Jeux et sports à Byzance,” *Les dossiers d’archéologie* 45, pp. 83-87.

W. Duczko 2004, *Viking Rus: Studies on the Presence of Scandinavians in Eastern Europe*, Leiden.

- S. Franklin & J. Shepard 1996, *The Emergence of Rus, 750-1200*, London.
- H. Gustavson 2006, *Gotlands runinskrifter 3. Boge socken G 275-G 281*.
(http://old.raa.se/cms/showdocument/documents/extern_webbplats/2006/juni/15_boge.pdf).
- R. Guiland 1969, *Études de topographie de Constantinople byzantine*, 2 vols., Berlin.
- J. F. Haldon 2013, “Information and War: Some Comments on Defensive Strategy and Information in the Middle Byzantine Period (ca. A.D. 660-1025),” in A. Sarantis & N. Christie eds., *War and Warfare in Late Antiquity*, Leiden - Boston, pp. 373-393.
- J. F. Haldon 2014, *A Critical Commentary on the Taktika of Leo VI*, Washington D.C.
- L. Havlikova 1991, “Slavic Ships in 5th-12th Centuries Byzantine Historiography,” *Byzantinoslavica* 52, pp. 89-104.
- J. Howard-Johnston 2000, “The De administrando imperio: A Re-examination of the Text and a Re-Evaluation of its Evidence about the Rus’,” in M. Kazanski et al., eds., *Les Centres proto-urbains russes entre Scandinavie, Byzance et Orient*, Paris, pp. 301-336.
- 今村栄一 2004, 「都市ノヴゴロドの成立 — 最近の考古学研究を中心に —」『ロシア史研究』75, 74-84 頁。
- 栗生沢猛夫 2015, 『『ロシア原初年代記』を読む — キエフ・ルーシとヨーロッパ、あるいは「ロシアとヨーロッパ」についての覚書』成文堂。
- G. G. Litavrin 1992, “Die Kiever Rus’ und Byzanz im 9. und 10. Jahrhundert,” *Byzantinische Forschungen* 18, S. 43-59.
- T. K. Λουγγής 1990, *Κωνσταντίνου Ζ΄ Πορφυρογέννητου De administrando imperio (Πρὸς τὸν ἴδιον υἱὸν Ῥωμανόν)*, Θεσσαλονίκη.
- T. K. Λουγγής 1994, “Η θέση των Ρως στη βυζαντινή πολιτική ιδεολογία τον δέκατον αιώνα: Ο δρόμος προς τον εκχριστιανισμό,” *Byzantina* 17, σ. 303-316.
- A. Madgearu 2013, *Byzantine Military Organization on the Danube, 10th-12th Centuries*, Leiden - Boston.
- E. Melin 2003a, “Sambatás’ and City Names in Ch. 9 of Constantine Porphyrogenitus’ *De administrando imperio*,” *Die Welt der Slawen* 48, pp. 187-192.
- E. Melin 2003b, “The Names of the Dnieper Rapids in Chapter 9 of Constantine Porphyrogenitus’ *De administrando imperio*,” *Scando-Slavica* 49, pp. 35-62.
- E. Mel’nikova 2016, “Rhosia and the Rus in Constantine VII Porphyrogenetos’ *De administrando imperio*,” in F. Androschchuk et al., eds., *Byzantium and the Viking World*, Uppsala, pp. 315-336.
- Gy. Moravcsik 1958, *Byzantinoturcica*, 2 vols., 2nd edn., Berlin.
- A. H. Насонов 1951, *Русская земля и образование территории древнерусского*

- государства, Москва.
- G. Novello 2005, "I Rus' a Costantinopoli nel X secolo: la Via del Dnepr e la permanenza nella capitale," *Porphyra* 6, pp. 14-29.
- D. Obolensky 1962, "Commentary [to the chapter 9 of DAI]," in R. J. H. Jenkins ed., *Constantine Porphyrogenitus De Administrando Imperio: A Commentary*, Washington, D.C., pp. 16-61.
- 小澤実 2015, 「交渉するヴァイキング商人 —10 世紀におけるビザンツ帝国とルーシの交易協定の検討から」 斯波照雄、玉木俊明編『北海・バルト海の商業世界』悠書館、113-148 頁。
- S. Plokhy 2006, *The Origins of the Slavic Nations: Premodern Identities in Russia, Ukraine, and Belarus*, Cambridge.
- M. Д. Прищёлков 1941, "Киевское государство второй половины X в. по византийским источникам," *Учёные записки ЛГУ* 8, стр. 215-246.
- O. Pritsak 1983, "Where was Constantine's Inner Rus?," *Harvard Ukrainian Studies* 7, pp. 555-567.
- Y. Rotman 2009, *Byzantine Slavery and the Mediterranean World*, trans. by J. M. Todd, Cambridge, MA - London.
- Ł. Różycki 2014, "Description de l'Ukraine in light of *De Administrando Imperio*: Two Accounts of a Journey along the Dnieper," *Byzantinoslavica* 72/1-2, pp. 122-135.
- A. G. C. Savvides 1993, "Byzantines and Oghuz (Ghuzz): Some Observations on the Nomenclature," *Byzantinoslavica* 54/1, pp. 147-55.
- J. Shepard 1985, "Information, Disinformation and Delay in Byzantine Diplomacy," *Byzantinische Forschungen* 10, pp. 233-293.
- J. Shepard 1998, "Constantinople - Gateway to the North: the Russians," in C. Mango & G. Dagron eds, *Constantinople and Its Hinterland*, Aldershot, pp. 243-260.
- 清水睦夫 1995, 「ロシア国家の起源」 田中陽兒、倉持俊一、和田春樹編『世界歴史大系 ロシア史 1—9 ~ 17 世紀 —』山川出版社、3-58 頁。
- I. Sorlin 1965, "Le témoignage de Constantin VII Porphyrogénète sur l'état ethnique et politique de la Russie au début du Xe siècle," *Cahiers du monde russe et soviétique* 6/2, pp. 147-188.
- I. Sorlin 2000, "Voies commerciales, villes et peuplement de la Rôsia au Xe siècle d'après le *De Administrando Imperio* de Constantin Porphyrogénète," in M. Kazanski et al., eds., *Les centres proto-urbains russes entre Scandinavie, Byzance et Orient*, Paris, pp. 337-355.
- P. Soustal 1997, "Mesembria," in *Reallexikon zur byzantinischen Kunst*, vol. VI, S. 218-244.
- P. M. Strässle 1990, "To monoxylon in Konstantin VII. Porphyrogenetos' Werk *De administrando imperio*," *Études Balkaniques* 26/2, S. 93-106.
- 田中陽兒 1995, 「キエフ国家の形成」 田中陽兒、倉持俊一、和田春樹編『世

- 界歴史大系 ロシア史 1—9 ～ 17 世紀 —』山川出版社、59-92 頁。
- П. Н. Третьяков 1953, *Восточнославянские племена*, Москва.
- F. Uspenskij 2015, “Towards the Etymology of the Names of the Dnieper Rapids in Constantine Porphyrogenitus: *Врѣсма Нероѡ*,” *Viking and Medieval Scandinavia* 11, pp. 231-239.
- 山口巖 1983, 「コーンスタンチノス・ポルピログゲネートス 帝国統治論 IV」『古代ロシア研究』15、47-60 頁。

註

- (1) 本稿執筆にあたって貴重なコメントをくださった小澤実、窪信一の両名に感謝いたします。
- (2) 913-920年は摂政下、920-944年はロマノス1世レカペノスの共同皇帝として。
- (3) 第9章の註釈は、DAI註釈全体のうち約4分の1の分量を占める。
- (4) この他に、第9章の現代語訳を含む論考として Sorlin 1965 と Sorlin 2000（フランス語）、Novello 2005（イタリア語）など。
- (5) その他個別の論点については、下の訳註を参照。
- (6) 11世紀前半に編纂されたと思しき逸名著者の戦術論（作品名無し）の記述を参照 [BMT, pp. 292-293]。この時期の帝国における情報収集一般については Haldon 2013 を参照。
- (7) 付言するならば、キエフからビザンツ帝国領までの道中において頻繁に述べられる危険地点の情報は、キエフへと向かうビザンツの使者や軍隊にとっても有益なものであっただろう。
- (8) コンスタンティノスの主要な関心がルーシの旅程の弱点についての情報であったという主張は、Shepard 1985, p. 272; Franklin & Shepard 1996, p. 113 がすでに示唆している。
- (9) Howard-Johnston 2000 も第9章における情報が DAI 編纂時期の状況を反映したものと主張する。
- (10) 他方で、この語がスカンディナヴィアからスラヴ語を経ずに直接ギリシア語に入ったと主張している研究者もいる [Бибиков 2003, стр. 101-102]。ギリシア語史料での初出は、9世紀前半の聖人伝『聖ゲオルギオス伝』とされるが、この史料の作者と年代については議論の余地がある。年代が明確にわかっている初出史料はフォティオスの記述であり、860年に「ロス (Ρῶς)」がビザンツに襲来したことについて言及している。他方で、ラテン語史料であるヨハネス・ディアコヌス『ヴェネツィア年代記』が、同時期のノルマン人のビザンツ入寇について記述しており、これをフォティオスらが記した「ロス」の侵入と同一視する議論もある [Obolensky 1962, p. 20]。また、ラテン語史料である『サン・ベルタン年代記』の839年についての記述によれば、インゲルハイムのルートヴィヒ敬虔帝のもとに送られたビザンツ帝国の使節の中に「ロス (Rhos)」と自称する者たちが含まれており、彼らはスカンディナヴィアから来たスウェーデン＝ノルマン人であったとされている。この語はギリシア語の「ロス (Ρῶς)」の音訳だと考える研究者は多い [栗生沢 2015, 66-77 頁; Obolensky 1962, pp. 20-21 など]。一方、M・ビビコフらはこれもスカンディナヴィアから直接入ったとしている。すなわち、ギリシア語の「ロス (Ρῶς)」もラテン語の「ロス (Rhos)」どちらもスカンディナヴィアから到来した人々の自称を直接取り入れたものであるというのである [Бибиков, Мельникова & Петрухин 2000]。しかし、Danylenko 2004, p. 3, n. 11 は言語学的に根拠薄弱だとしている。
- (11) 他方、清水 1995 では、(1) 現実の権力機構の構成層（最初の公であったリュリックとその随行者、および「ルーシ族」の出自とされるその子孫たち）、(2) キエフを中心とするドニエプル川中流地域を限定的に指す地理的概念、(3) ルーシ（キエフ）の大主教の管轄下にある正教徒、(4) 「ルーシの言葉」を話す人々

- という分類が提示されている。
- (12) しかし、他方で極端な反ノルマン主義の立場を堅持する出版物も後を絶たない。詳細については栗生沢 2015, 101-110 頁、とくに 107-110 頁を見よ。
- (13) それ以前は「ルーシの地」を指す語としては「ルースカヤ・ゼムリヤ (ruskaya zemlya)」ないしは「ストラナー・ルースカヤ (strana ruskaya)」といった語が用いられていた [Obolensky 1962, p. 20]。
- (14) ただし、この二説以外にも、ヴォルガ中流のスカンディナヴィア人の居住地を指すとする説、スウェーデンのロスラーゲン、北ロシアのスウェーデン人居住地、ヴァイキングが入植したロシアの地域全て (対して内ロシアはスカンディナヴィア)、第 9 章で言及される都市のうち黒海周辺を除く全て、といった様々な案が提唱されている [Obolensky 1962, p. 26]。
- (15) その際彼は、イドリースィーも「外ロシア」に近い用語 (ar-rūsiya al-khārija) を用いていることを指摘し、これがロストフ地方を指すものだと解釈している。A・ダニレンコも彼の見解を支持している [Danylenko 2004, p. 5, n. 32]。
- (16) ナソノフはその際、「外ロシア」は北方のノヴゴロド周辺だとしている。
- (17) この地理感覚は 12 世紀の歴史叙述においても認められるとしている。
- (18) メリニコワの解釈もこれに近い [Mel'nikova, 2016, p. 325]。しかしダニレンコはこれについても懐疑的である [Danylenko 2004, p. 5, n. 32]。
- (19) 「丸木船 (μονόξυλα)。「独木船 (山口訳) [山口 1983]、舷側板一枚の舟 (清水訳) [清水 1995, 32 頁]。古代の用例では、この語はまさに 2～3 人乗りの丸木舟を指した。しかし、Strässle 1990 はここでこの語が用いられているのには、ビザンツ人からルーシへの蔑視のニュアンスもあり、実際はより手の込んだ、遠洋航海にも適した船が用いられていたと目している。ビザンツの歴史叙述に現れるスラヴ人たちが用いる丸木船一般については、Havlikova 1991 を参照。
- (20) 「ロス (ルーシ)」および「ロシア」の詳細については上記研究動向 (3) および (4) を参照。
- (21) 第 9 章で扱われるドニエプル川を利用した交易路は、まさに『原初年代記』において「ヴァリヤークからグレキ (ギリシア) への道」とよばれるルートの一部である。ルーシたちは時には交易者として、時には侵入者としてこの水路を大いに活用していた。911 年及び 944 年に対ビザンツ遠征を行ったルーシたちが、それに引き続いて両者の交易に関わる協定を結んだことは、『原初年代記』からよく知られている。S・フランクリンと J・シェパードによれば、第 9 章の記述はそうした協定下での状況をよく反映しているという [Franklin & Shepard 1996, p. 210]。
- (22) 詳細については、上記研究動向 (4) を参照。
- (23) 「ネモガルダス (Νεμογαρδάς, ノヴゴロド)」はこの頃キエフに次いで大きな都市であり、イリメニ湖から流れ出すヴォルホフ川沿いに位置するバルト＝黒海水路の要衝であった。Bury 1906 は「Νεβογαρδάς」の読みを提案しており、Obolensky 1962, p. 26; КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 310 をはじめとする多くの研究者はこれを受け入れている。史料からはこの都市が 9 世紀までに創立されたことが窺えるものの、現在のノヴゴロドの発掘からは 9 世紀の層は確認されておらず、最古の居住地ですら 10 世紀半ばのものである。だが、ノヴゴロド周辺のヴォルホフ川流域の発掘からは 9 世紀の集落が確認できており、と

くにノヴゴロドの南に位置するゴロジシチェがその中心であったと判明している。そのため、11世紀に公が現在のノヴゴロドに砦を移すまでは、ゴロジシチェがこの地方の中枢であり続け、コンスタンティノス7世がここで「ネモガルダス」と述べている都市が、現在のノヴゴロドを指すかは不明であるとする説もある。いずれにせよ、ノヴゴロド形成についての議論はいまだ決着をみていない。20世紀後半から今世紀にかけての考古学的研究の動向については、今村 2004 を見よ。

なお、古ノルド語のこの都市の名称は「Hólmgarðr」であり、当時のスカンディナヴィアでの呼称もこれに類似したものであったであろうという推測に基づき、ギリシア語形の「-γαρδός」アクセントの位置も、スカンディナヴィア由来の情報提供者が用いた形を転写したものだと考えられている [Obolensky 1962, pp. 26-27]。

- (24) 「ロシアの首長 (ἄρχων Ρωσίας)」。10世紀ビザンツの公文書では、ルーシの君主はこのように表記されていたとされる。Cf. De Cer. pp. 690-691. 『原初年代記』における944年の対ビザンツ条約の記述においても、イーゴリ（次註参照）がスラヴ語での同様の名称で呼ばれている。911年の条約でも、オレーグが同様の称号を使用している。なお、後代の君主、キエフ公ムスティスラフ（在位1167-1169年）のものではあるが、「ロシアの大公」のギリシア語形である「μέγας ἄρχων Ρωσίας」を用いた封鉛も出土している [Obolensky 1962, p. 29]。ルーシの君主号については、さしあたり栗生沢 2015, 81-89 頁を参照。
- (25) 「インゴル (Ἰγγωρ)」。キエフ公イーゴリ（在位913頃～945年）。この名前は、スカンディナヴィア系のイングヴァールという人名に由来すると考えられている。944年にビザンツ遠征を行い、その後協定を結んだことで知られる。945年、ドレヴリャーネに対する巡回徴貢（下記註92、93を参照）に赴いた際、住民に殺害された [Obolensky 1962, p. 28; 田中 1995, 65 頁]。
- (26) 「スフェンドストラボス (Σφενδοσθλάβος)」。キエフ公スヴァトスラフ（在位945頃～972あるいは973年 [957年以前は母オリガの摂政下]）。親政を開始して以降はハザールやブルガリア等に対する遠征を行い、勢力圏を広げた。ブルガリアをめぐるビザンツとも争ったが、敗れて971年に協定を結んでいる。その帰路、DAI第9章でも言及されているドニエプル早瀬においてペチェネグに待ち伏せされ、戦死した [田中 1995, 69-73 頁]。ドニエプル早瀬を渡る際にルーシが脆弱となることや、彼らにとってペチェネグが脅威となることは、まさにDAI第9章が述べるところである。上記研究動向(2)も参照。この名前はスラヴ語であり、彼はキエフ国家で初めてスラヴ系の名前を持つ君主となった。ギリシア語形については、レオン・ディアコノスの表記でも同様に「Σφεν-」と鼻音化しており、古代教会スラヴ語の「Свъ-」に対応していると思われる。ロシアでは鼻母音は10世紀頃までに発音されなくなっていたと考えられているものの、ブルガリアではこの頃はまだ用いられており、この語は南スラヴ語を経てギリシア語に入ったと考えられている [Obolensky 1962, pp. 27-28]。スヴァトスラフが当時実際にノヴゴロドにいたかどうかは不明だが、10世紀のキエフ＝ルーシの諸侯は息子たちの1人をノヴゴロドに置くのを通例としていた [Obolensky 1962, p. 28]。
- (27) 「ミリニスカ (Μιλινίσκα)」。スモレンスクに同定される。ドニエプルと西

ドヴィナ、ロヴァチ、ヴォルガの諸河川の分水嶺をなす場所に立地している [Obolensky 1962, p. 30; Belke & Soustal 1995, S. 79, Anm. 41]。ギリシア語形については、これまでに様々な説明が試みられている。語頭の「σ」の欠落については、語頭音消失 (aphaeresis) の結果とする説、当初は「ἀπό τῆς Σμιλινίσκας」であり、連続した「σ」が融合したとする説、また、他の地名、即ち古代ロシア語の「и-Смольньска」を「из Мольньска」との混同によるものとする説がある。最初の母音が「i」になっている点については、後続の2つの「i」の影響とする説がある。КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 312 を見よ。しかし近年出されたメリンの説では、このような形になるのはポントス方言に見られるようなギリシア語の s 音の脱落現象の結果である可能性が指摘されている [Melin 2003a, pp. 187-189]。他方で、ここでのミリニスカはすくなくとも今日のスモレンスクの位置にはなかったとする説もある。考古学的な調査によればスモレンスクが形成されたのは少なくとも DAI の編纂より 100 年以上後であり、ここでミリニスカと呼ばれているのは、今日のグネズドヴォ (Гнездово) に存在していたことが確認されている、スカンディナヴィア系の人々の集落であるとするものである [Mel'nikova 2016, pp. 329-330]。

- (28) 「テリウツァン (Τελιούτζαν)」。多くの研究者によってリュウベチに同定されている。オボレンスキーもギリシア語形の言語学的説明には難点が残るものの、場所の同定については地理的・状況的に考えてほぼ疑う余地はないとしている。今日のリュウベチはドニエプル中流、キエフの北方に位置する [Obolensky 1962, p. 30]。ギリシア語形について、先行研究の多くではこの名詞に先行する「τε」ないしは「τὰ」と同化した形であると推測されており、本来のギリシア語主格形については「τὰ Λιούτζα」、「τε Λιού[β]τζα」、「τὰ Λιού(β)τζα」、「Τελιούτζα」等様々な可能性が指摘されている。しかしメリンはこれについてもポントス方言の影響を指摘し、本来の形の「*Lju/bь/ča」から、「b」音の脱落や母音弱化が起こった上、さらに定冠詞「τὴν」の「v」が脱落し、「η」が「ε」となった結果、このギリシア語形になったとしている [Melin 2003a, pp. 189-190]。
- (29) 「ツェルニゴガ (Τζερνιγῶγα)」。チェルニゴフに同定される。キエフ北東のデスナ川河岸に位置し、ドニエプル水路近くに位置するこの都市は、10 世紀にはキエフに次ぐ経済的重要性を持っており、907 年、944 年の協定では、キエフの下でリュウベチとともに、ビザンツからの貢納を受ける対象として言及されている (『原初年代記』当該年の箇所を参照)。
- (30) 「ブセグラデ (Βουσεγραδέ)」。ヴィシゴロドに同定される。ドニエプル右岸、キエフの上流 20 キロに位置する都市。従来ここでのギリシア語形は古東スラヴ語の「ヴィシゴロド (Vyshgorod)」ではなく、南スラヴ語の「ヴィシエグラド (Vyshegrad)」に由来しており、ギリシア語形の語尾の「-ε」はスラヴ語の地格によるものだとされてきた。そのため、オボレンスキーは DAI のこの部分をスラヴ語の記録ないし口伝に依拠している根拠の一つとしている [Obolensky 1962, pp. 30-31; Belke & Soustal 1995, S. 79, Anm. 40, 41]。しかしこれについてもメリンは、主格が「-ες」で終わる単語の属格形が「-ε」となるポントス方言の特徴によるものだとすれば説明がつくとしている [Melin 2003a, pp. 190-191]。
- (31) ドニエプル川のこと。上記註 21 も参照。

- (32) キエフのこと。DAIではキエフの表記が統一されておらず(9/8:「τὸ Κιοάβα」, 9/15:「τὸν Κίοβα」, 9/106, 111:「τὸν Κιαβον」)、これは第9章の2パートがそれぞれ異なる典拠に由来している根拠だと考えられている [Obolensky 1962, pp. 18-20]。情報源の詳細については、上記研究動向(1)を見よ。なおキエフに「サンバタス」の呼称が用いられているのはこの箇所だけである。古ノルド語、スラヴ諸語、アルメニア語、ヘブライ語、ハンガリー語、チュルク語、ハザール語など、様々な言語がその由来の候補として挙げられてきたが、決定的なものはない。従来有力視されていた説は、このうち「高い城塞」を意味するハザール語「*Sambat」と関係するというものである [Obolensky 1962, pp. 32-33; КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 315-316; Belke & Soustal 1995, S. 79, Anm. 42]。これに対してメリンは、「サンバタス」がキエフの別称であるという前提自体を退ける新説を唱えている。彼女によれば、この語は古スウェーデン語の「sambåd」(「a levy」, ここでは徴収された集団の意) から来たものであり、キエフはそうして集められた人々の最初の集積地点であるという [Melin 2003a, p. 187]。
- (33) 「貢納者 (πακτιῶται)」はギリシア語で「貢納」と「協約」の双方を意味する「πάκτων」(ラテン語の pactum に由来) から派生したものであるが、ここではルーシとスラヴ人の関係性からして、前者の意であろう。DAI, 9.105-109においても、明確にスラヴ人たちが貢納者として登場している。同様の用法は DAI, 37.43-5 にも存在する [Obolensky 1962, p. 33]。
- (34) 第9章には5つのスラヴ人集団の名称が登場する [DAI, 9.9-10, 107-110]。即ち、クリバタイエノイ/クリビツォイ (『原初年代記』ではクリヴィチ)、レンザネノイ、ベ/デルビヤノイ (ドレヴリャーネ)、ドゥルグビタイ (ドレゴヴィチ)、セベリオイ (セヴェリャーネ) である。このうちレンザネノイを除く全てが、『原初年代記』第1章に登場する13の東スラヴ人に含まれている。加えて、DAI, 37.44 においても、ペチェネグに隣接する、ルーシに貢納するスラヴ人として、「ウルティネス、デルビヤノイ、レンザネノイ」が登場する。デルビヤノイはベルビヤノイと同じくドレヴリャーネに、ウルティネスはウリチに同定されている [Mel'nikova 2016, p. 325]。東スラヴ人の社会構造については、主にソビエトやロシアにおいて、それが地縁的村落共同体の様相を呈するののか、それとも血縁的氏族社会であったのか、長らく論争が交わされてきた。20世紀後半には考古学的な証拠と突き合わせ、彼らは多くの場合は小規模で安定した集団をなし、10世紀に定住した地域に500-600年間住み続け、共通の社会的・文化的伝統と言語を持っていたとする説が提示されたが、オボレンスキーもこの見解を紹介するにとどめている [Obolensky 1962, p. 34. また、清水 1995, 24-28 頁を参照]。いずれのスラヴ人も明確にルーシとは区別され、彼らに貢納するものとされており、前出のロシア—外ロシアの対応関係の解釈にも関連付けられることが多い。クリバタイエノイ (クリヴィチ) については、『原初年代記』にあらわれるスラヴ人のうち最古のもので、ヴォルガ、西ドヴィナ、及びドニエプル上支流を根城とし、その中心はスモレンスクであった。4-10世紀の彼らの埋葬地の発掘も、そのことを裏付けている。オボレンスキーは、ここでのギリシア語形はスラヴ語の単数形「Krivitin」に由来するものと考えている。また、DAI, 9.108 では複数属格「Κριβιτζῶν」(主格「Κριβιτζοί」)の形で登

- 場するが、こちらもスラヴ語の複数形「Kriviči」に由来するものと見なされている [Obolensky 1962, p. 34]。
- (35) 「レンザネノイ (Λενζανήνοι)」。DAI, 37.44 では「Λενζενίνοις」の形で登場する。かねてより『原初年代記』に登場する、ヴォルニニのルツクに居住するリヤヒに同定する意見があり、これを支持する研究者もいる [Sorlin 2000, p. 344]。しかし、オボレンスキーは、共通スラヴ語 (common Slav) の「*lędjaninŭ (= 未耕地の住人)」、そこから派生したであろう古ロシア語の「lędžaninŭ/*lęžaninŭ」との関連性を指摘する意見を紹介するにとどめており [Obolensky 1962, pp. 34-35]、メリニコワの近稿もまた、他のいかなる史料においても該当するあるいは類似する名称が見出されないばかりか、関連付けられうる考古遺物も出土していないと述べている。配置を手がかりにチヴェルツィヤヴォルニニャーネと同定する意見や、語義を手がかりにポリャーネと同定する見解も提示されているが、メリニコワは慎重を期すべきだとしている [Mel'nikova 2016, p. 325]。即ち、現時点ではいかなるスラヴ系集団とも決定的には同定しがたく、地理的な位置についてはさらに手がかりがない。
- (36) スクラベニア (Σκλαβηνία [sg. Σκλαβηνία]) は、7-9 世紀においては専らバルカンにおけるスラヴ人たちの居住地を指したが、この頃までにはより広く「スラヴ人たち (Σκλαβηνοί)」が住む土地一般を指すようになった [Obolensky 1962, p. 35; ODB, vol. III, pp. 1910-1911, s.v. Sklavenia]。
- (37) 実際は周囲に山のような地形は存在せず、この山がどこかは不明。ドニエプル航路北部ではヴァルダイ丘陵くらいしか高いところはない [Obolensky 1962, p. 35; КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 317]。しかし、「山」ではなく、スラヴ語で「(川に対しての) 陸地 (dry land)」を意味する「gory」、「gora」の翻訳である可能性も指摘されている。また、ロシア語ではこの語は「森」の意にとることも可能であり、「森で (na gorakh)」丸木船を切り出したという元の証言が誤解された可能性もある [Obolensky 1962, pp. 35-36]。
- (38) 厳密に言えばドニエプル水系に湖から流れ出す箇所はない。オボレンスキーはバルト海・ドニエプル上流間の水路にとりわけ多く点在する湖沼を指すものだとして推定している [Obolensky 1962, p. 36]。あるいは、川の一部を指している可能性もある [Belke & Soustal 1995, S. 80, Anm. 48]。
- (39) 上記註 32 参照。
- (40) おそらく前年度に使われた船を何らかの手段で (ドニエプルを遡行させて?) 持ち帰るものと考えられるが、その詳細な方法は不明である。オボレンスキーはここから毎年恒例のものとして船団が派遣されていた可能性を指摘しつつも、DAI の他箇所 (2.16-23) においては、ルーシとベチェネグの間に協定がある時のみ通商可能とされている点にも留意すべきだとしている [Obolensky 1962, p. 37]。
- (41) 「それらから櫂や櫂座や他の備品をそれら [船体] に取り付け (βάλλουσιν πέλλας καὶ σκαρμούς εἰς αὐτὰ καὶ λοιπὰς χρείας)」。異なる解釈として、シュテスレ [Strässle 1990, S. 101] は「πέλλαι」をシンタクスから見て船それ自体の機能に関わるものではなく、武器ないし道具として使う「Spaten (鋤)」か、風雨や敵からの保護、水漏れからの密閉のための「Falle (毛皮)」である可能性を指摘し、ここではおそらく毛皮の意義ではないかと推測している。他方でメリニ

コワ [Mel'nikova 2016, p. 321] は、舷縁、手すり、舷牆を意味する可能性を指摘している。

- (42) 「... そのようにして (καὶ οὕτως)」は モラフチク版にはないが、I・ベッカーによる補いを採用した。
- (43) 記述の通り、船の準備にはいくつかの段階(シュテスレによれば3段階)があったようである。まず冬の間にはスラヴ人たちによって行われた加工がある(第1段階)。これには「κόπτουσι τὰ μονόξυλα」の段階と、「καταρτίσαντες」の段階があるが、オボレンスキーは前者を切り出し、後者をくり抜きを含む加工だと解釈した(ただし、切り倒す前に加工することもあり得たとしている)。他方でシュテスレは前者にくり抜きが含まれ、後者の段階では既に簡単な艀装が含まれており、簡易マストも取り付けられていたとする。それ以降の作業はルーシに引き渡された後で行われた。4-5月の段階(「ἐξαρτισμός」、即ち第2段階)については、オボレンスキーは櫂や櫂受け、その他必要な備品の取り付けのような艀装が行われたとしているが、シュテスレは「σκαρμός」を舵の杭ないしは櫂座、上述のように「πέλλαι」を毛皮と解釈し、「ἐξοπλίζουσιν」は文字通り武装が施されたものと読む。そして最終段階として、聖アイテリオスの島において、沿岸航海に耐えうる装備が施されるのであるが、シュテスレはこの段階では沖合用の帆と帆桁、櫂が取り付けられたと目している [Obolensky 1962, pp. 23-26, 36; Strässle 1990, S. 100]。
- (44) 彼らの旅程については、Obolensky 1962, p. 37を参照。DAIの記述を要約すると、出発前は4月にキエフに集合、おそらく5月のうちに艀装、6月に出発となる。実際、ロシアの河川は4月に解氷し、黒海の航海条件は6月・7月に最適となる。また、現にビザンツへのルーシの艦隊遠征も6月(860年、941年、1043年)に行われているが、オボレンスキーは艦隊と商用船団の条件の違いにも留意すべきだとしている。『原初年代記』に記される944年の条約によれば、ビザンツ帝国側では秋にはコンスタンティノーブルを離れるように要請したという。オボレンスキーは11月には巡回徴貢のために帰還している必要があるとしているが、徴税の主体は必ずしも交易に従事した者とは限らないだろう。なお、フランクリンとシェパードは、ドニエプル河口からアナトリア北岸までは順風であれば軽量の舟で48時間以内に到達可能であると推定している [Franklin & Shepard 1996, p. 113]。
- (45) ヴィタチョフに同定される。キエフ・ルーシ時代はヴィティチェフと呼ばれた。キエフの下流60キロ辺りに位置する。キエフに次ぐ集合地点とされ、なおかつ「全ての丸木船」が集まるまでの2-3日の待機期間を含むのは、おそらくペレヤスラヴリ方面からの船団もここで合流したためであろう [Obolensky 1962, pp. 37-38; Melin 2003a, p. 187]。
- (46) 「エッスベ (Εσσοπιή)」は、コンスタンティノスによれば「ロシアとスクラベニアの言葉で」「眠るな」という動詞の命令形であると説明されている。この言葉にスラヴ語の否定辞「ne」が含意されているとするならば、本来想定されるべきギリシア語は「νεσσοπιή」であり、口述筆記ないしは伝来の過程で語頭の「ν」が直前の単語「ἐπονομαζόμενον」の語尾「ν」に吸収されたのだという説が一般に受け入れられている。このギリシア語単語についてはこれまで様々な語源が提案されてきたが、どれも決定的とは言えなかった。最近の

Melin 2003b, pp. 36-38 によれば、この言葉は古代教会スラヴ語ないし古代ロシア語の動詞・現在分詞「neuspajęi / neuspajaj (監視している [=眠りに落ちていない])」であるとされる。この説は、近世におけるこの早瀬のトルコ語名「コダク (Kodak = 監視者・警備員)」の由来をうまく説明しているように思われる。

この早瀬は、現代のカイダツキー早瀬に同定されている。これはドニエプロペトロフスクから 18 キロ下ったところにあり、幅は 331 メートル、右岸側の長さは 512 メートル、左岸の長さは 544 メートル、高低差は 1.94 メートルとされる [Obolensky 1962, p. 43]。

- (47) 「ポロ競技場 (τζουκανιστήριον)」。この言葉は中世ペルシア語 (パフラヴィー語) 由来である。ポロ競技は 5 世紀にペルシアから輸入されたい。コンスタンティノーブルにおける最初の競技場は 5 世紀のテオドシウス 2 世が宮殿の東に建設したものであるが、この場所にはのちにバシレイオス 1 世によって「新教会 (Νέα Ἐκκλησία)」が建設されることとなり、ポロ競技場はより東側へと移設された (史料証言については Obolensky 1962, pp. 43-44 を見よ)。従ってここで言及されているポロ競技場は、おそらく後者とみてよかろう [Guilland 1969, vol. I, p. 184; Ducellier 1980; Belke & Soustal 1995, S. 83 を参照]。
- (48) オボレンスキーは後代のコサックの早瀬下りの事例から類推して、右岸への着岸を想定している。とはいえカープの外側となる左岸はそもそも急流であり、着岸に適した場所ではない。
- (49) 第 9 章で交易品 (ここでは「πράγματα」) に触れているのはこの箇所と DAI, 9.50 だけである。ルーシらのコンスタンティノーブルへの旅には外交と交易の 2 つの主要な目的があった。ルーシからビザンツへ輸出されたものには毛皮、蠟、蜜、そして奴隷などが想定されている (叙述史料では、例えば『原初年代記』33-40, 53-57 頁など)。一方でビザンツからは絹やアイコン、装飾品、写本などが輸出された (DAI, 9.52 も見よ)。ルーシ=ビザンツ間の交易に関しては多くの研究があるが、さしあたり Sorlin 2000; 小澤 2015; 栗生沢 2015 を参照。
- (50) テクストに脱落が認められる。КБ (Литаврин), стр. 322 他は、「丸木船を引っ張る」という補いを提案している。
- (51) 「ウルボルシ (Οὐλβορσί)」の名前は、スカンディナヴィア系の名詞「Holmfors」ないし「Hulmfors」(holm=小島+fors=滝、早瀬) に由来することが既に 18 世紀より主張されており、この点を疑う者はいない。語形に関して言えば、ギリシア語の「Οὐλβορσί」は「Holmfors/Hulmfors」の与格/地格形を表すとされてきたが [Obolensky 1962, p. 45]、古ノルド語で早瀬を表す他の言葉に与格がまったく見出されないことから、この意見に反対する研究者もいる [Melin 2003b, p. 38]。
- (52) 「オストロブニプラク (Ὀστροβουνιπράχ)」がスラヴ語の名詞「ostrov (島)」の形容詞形+「prag (早瀬)」から構成されていることは疑いが無い。とはいえ前半の形容詞の元々の形については、現在に至るまで一致した見解は得られていない。かつては東スラヴ語形と南スラヴ語形のそれぞれを主張する研究者の間で対立があったが、1970 年代以降は南スラヴ語 (古代教会スラヴ語) 形の「*ostrovъn (ъ)」が有力と見なされるようになった。「Ὀστροβουνι」の中の「ου」が南スラヴ語に見られる接尾辞「-ъ」を反映しているとする見解である [Danylenko 2001, p. 44]。一方で近年では、南スラヴ語であることには同意しつ

つも、別の接尾辞「-ъnyj」を想定した上で、「*ostrovъnyj」の中で連続する子音「[v]」と「[n]」をギリシア語に転写する際、後者の制約から母音挿入「ou」が行われたのだとする説も出ている [Melin 2003b, pp. 38-39]。「-πραχ」については、語尾の「χ」が南スラヴ語の発音を反映したものとする見解が支配的である。

- (53) ここでの著者によるギリシア語訳は不正確で、本来は「小島の早瀬」とすべきである（ただしこの点については下記註 66 を参照）。この早瀬は、現在スルスキーと呼ばれる、カイダツキー（エッスベ）早瀬から 7.5 キロほど下った場所か、あるいはそこから 500 メートルほど下ったロハンスキーと呼ばれる場所のどちらか、あるいはその両方に同定される。スルスキー早瀬は右岸側 102 メートル、左岸側 72.5 メートルの長さで、高低差は 50 センチ。ロハンスキー早瀬は右岸側 271 メートル、左岸側 166 メートルの長さで、高低差は 1.6 メートルとされる [Obolensky 1962, pp. 45-46]。Androshchuk 2013, p. 120 は強い論拠はないとしながらも、考古史料の存在などからスルスキー早瀬のほうを好んでいる。
- (54) 「格蘭ドリ (Γελανδρί)」は、本文の記述のように「スクラベニア」の言葉ではなく「ロシア」の言葉であり、「スクラベニア」に対応する語は欠けている。また本文で提示されているギリシア語訳「早瀬の騒音」も、素直に訳せば「騒がしい（早瀬）」である（ただしこの点については下記註 66 を参照）。「Γελανδρί」は古スウェーデン語の動詞「gælla（轟く、鳴り響く）」に由来することは疑いがない。かつてはその現在分詞形「gællandi」がギリシア語形の転写元であると説明されてきたが、この解釈はギリシア語転写の際に「p」が入った理由を十分に説明できていなかった。最近では、大きく分けて 2 つの説が現れている。1 つ目はダニレンコによるもので、彼は古スウェーデン語の現在分詞の擬人化 (personification) によって、「gællandi」の語尾に「r」が付加されたのだと説明する [Danylenko 2001, p. 50]。もう 1 つは 20 世紀初頭に H・ピッピングによって提唱され、2003 年にメリンが改めて採りあげた説で、この言葉を現在分詞の複数形として理解するものである。両説ともそれぞれ弱点を抱えており、この問題は未だ解決を見ていない [Melin 2003b, pp. 39-40 を見よ]。
- 格蘭ドリは、現在ではロハンスキー早瀬から 5 キロほど下った場所にあるズヴォネツキー早瀬に同定されている。右岸側は 186 メートル、左岸側は 218 メートルの長さで、高低差は 1.5 メートルほどとされる [Obolensky 1962, p. 46; Androshchuk 2013, p. 122]。
- (55) 「アエイフォル (Αειφόρ)」の語源解釈は 19 世紀以来試みられてきているが、現在に至るまで確実な見解は得られていない [Obolensky 1962, pp. 46-47]。近年改めてこの問題に取り組んだメリンは、他の事例に拠りつつ、「ἀει」を古スウェーデン語の副詞「ai（古ノルド語の ei = 継続的な、つねに）」、「φόρ」を古スウェーデン語の名詞「for（小川や湖にある場所で、人が水の中を歩いて渡れるほど浅いところ）」の合成語、すなわち「aifor（常に浅い早瀬）」とする解釈を発表している [Melin 2003b, pp. 40-41]。一方でゴットランド島のピルゴルドからは「aifur」という地名に言及する 10 世紀末のルーン碑文が確認されており、これが DAI における第 4 の早瀬を指すのではないかと指摘されている [Androshchuk 2013, p. 122 (なお同頁で参照されている Gustavson 2006 の頁数は、

「70」ではなく「24-70」である。ここでは Melin 2003b は参照されていないものの、「aifur」についての詳細な検討がほどこされている)。

- (56) 「ネアセト (Νεασιτή)」は古代教会スラヴ語の「nejesyť (飽くことのない、どん欲な)」に由来するというのが定説である。メリンはこの語が「川岸までも届かない水」を意味しようとし、「アエイフォル (常に浅い早瀬)」との意味上の近似を試みている [Melin 2003b, pp. 42-43]。一方で古代教会スラヴ語の「nejesyť」は「ペリカン」を意味する場合もあり、DAI の著者も後者の意味で説明している(「ペリカン」の語彙は、『詩篇』の古代教会スラヴ語訳に確認される)。しかしペリカンはドニエプル沿岸には生息しておらず、また彼らが岩場に巣を作ることもない。さらにネアセトがペリカンの意味だとすると、アエイフォル「常に浅い早瀬」と全く異なる意味となってしまう [Obolensky 1962, p. 47; Melin 2003b, p. 42]。なぜ DAI の著者が本文のような説明をしたのかは定かではないものの、あるいはスラヴ語話者の間ですでに「nejesyť」の意味の混乱、ないしは意図的な意味の取り替えがあったのかもしれない。

この早瀬は、現在のネナシュテツ (Nenasytets) 早瀬に同定されている。これは第3の早瀬から 6.5 キロほど下流に位置する、ドニエプル川で最大の早瀬である。右岸側は約 2.5 キロ、左岸側は約 1.6 キロの長さにおよび、高低差 5.9 メートルの滝がそびえている [Obolensky 1962, pp. 47-48]。

- (57) 「積荷 (πράγματα)」。上記註 49 を参照。
- (58) 「鎖で繋がれた奴隷 (τὰ ψυχάρια μετὰ τῶν ἀλύσεων)」。ルーシとビザンツの交易品として具体的に言及されているのはこの奴隷たちのみである。911 年の条約では、奴隷とされた戦時捕虜をお互いの国に対価を支払った上で帰還させることが取り決められている [『原初年代記』 37-38 頁]。加えて 944 年の条約では逃亡奴隷の返還に関する条項もある [『原初年代記』 54 頁。DAI, 9.32 および Sorlin 2000; Rotman 2009, pp. 77-79 も参照]。
- (59) 6 ビザンツ・マイルを指す。これは一般に約 9 キロメートルと推測されている [KB (Литаврин), стр. 324]。
- (60) 「荷物 (περζιμένα)」。この単語はラテン語「impedimenta」からの直接の借用語であるが、コンスタンティノス 7 世の時代が初出である [LBG, s.v. 語形に関する詳細は Binder 2000, S. 231-237]。
- (61) 「バルフォロス (Βαρουφόρος)」は、古ノルド語の「bára (波) (属格 báru) と「fors (滝、早瀬)」の合成語と見なすのが一般的である [Obolensky 1962, p. 48]。だがメリンは、湖や小川を指して「波」を用いる例は他に見られないとして、代わりに「barforsen ([岩や小島などから] 解放された早瀬)」との解釈を提示している [Melin 2003b, pp. 43-44]。
- (62) 「ブルネプラク (Βουλνηπράχ)」は一般にスラヴ語の名詞「vьlna (波)」の形容詞形「*vьlnьnъ」と「porogъ (早瀬)」の合成語、「波うつ早瀬」と理解されている [Obolensky 1962, pp. 48-49; Danylenko 2001, p. 45]。だがメリンは「vьlna (波)」の形容詞形に問題があるとしてこれを退け、「volьnyi (自由な)」を採用して、「(岩や小島などから) 解放された早瀬」と解釈している [Melin 2003b, pp. 44-46]。
- (63) このギリシア語の説明による「大きな湖」に相当する場所は現在確認されていない。研究者たちは、10 世紀当時この早瀬のあたりに戻り水ないし止水域が

あったと想定している [Obolensky 1962, p. 49; Melin 2003b, p. 45]。いずれにせよ、これまで提出されているこの早瀬の名前のいずれも、ギリシア語の説明に明白に合致しているとは言い難い。

第5の早瀬は現在ではヴォルニクスキー／ヴォルネクなどと呼ばれている。第4の早瀬から約14キロ下流に位置し、右岸側は576メートル、左岸側は501メートルの長さを持つ。高低差は2.4メートルである [Obolensky 1962, p. 49]。

- (64) 「レアンティ (Λεάντι)」は古スウェーデン語の動詞「lea (笑う)」の分詞「le(i) andi (笑い)」のことでありという説が有力であったが、これは併記されている「スクラベニア」の言葉「ベルツェ」とも、「水のたぎり」というギリシア語の説明とも一致していない。メルンは印欧祖語の語幹「*l̥ei (l̥ei)」が川の名前に用いられることを指摘し、レアンティもこの語に発するものとする。とはいえ彼女はこの語が「水のたぎり」をも意味しうると言うが、その説明は論拠を欠く。現在最も説得的と思われるのは、F・ウスペンスキーが最近発表したものである。彼は古北欧語の動詞「hlóa (沸き立つ)」が河川の文脈で用いられていることを発見したうえで、この(仮設的な)現在分詞形「*hlóandi」がギリシア語の「Λεάντι」に対応すると考えた [Uspenskij 2015]。ただしウスペンスキーはメルンの議論を参照していない。
- (65) 「ベルツェ (βερούτζη)」。オボレンスキーやメルンはこれを「vbr̥eti (沸き立つ)」の現在分詞と捉える一方、ダニレンコはこれを現在分詞ではなく、「古風な名詞派生語 (an archaic denominative)」とする [Obolensky 1962, p. 50; Danylenko 2001, pp. 52-58; Melin 2003b, pp. 49-51]。
- (66) 「水のたぎり (βράσμα νερού)」。第2、第3の早瀬の場合と同じく、ここでは2単語の倒置が生じているように見える(正確には、「たぎる水」)。メルンはこの現象が上記3箇所で見られていることから、偶然の産物とは考えにくいとする。1つの可能性として彼女は、イラン語派のオセッソ語に主要語と修飾語の内容が逆転する現象があることを指摘し、なんらかの形でこれが影響を与えたのではないかと言う [Melin 2003b, p. 56]。
- この早瀬は、確実ではないものの、現在のブディオ(ブディオフスキー)早瀬に同定されている。この早瀬は第5の早瀬から5.5キロほど下流に位置し、長さは右岸側で399メートル、左岸側で218メートル。高低差は1メートルとされる [Obolensky 1962, p. 50]。
- (67) 「ストルクン (Στρούκουν)」の伝統的解釈は、古スウェーデン語(ないし古ノルド語)の名詞「struk(a) ないし「struke (小さな早瀬)」の複数与格形「strukum」、あるいは再建された古スウェーデン語「*strukn (小川、小さい滝)」とするものである [Obolensky 1962, pp. 50-51]。一方で近年メルンは、より普及していたと思われる「stryk」の単数主格に、ギリシア語の地名語尾として一般的な「-ouν」が付加されたものであると説明している [Melin 2003b, pp. 52-53]。
- (68) 「ナブレゼ (Ναπρεζί)」の綴りは、K.-O・ファルクが20世紀中葉に提唱して以来、「Ναστρεζί」の誤記であるとの解釈が支配的である。由来に関しても、同じくファルクが古代教会スラヴ語の「*strъzъ (川の早い流れ)」に同定して以降、目立った反論は出ていない。問題はギリシア語に転写された際に現れた「Na-」の解釈である。ファルクは「*Nastreže」という形を想定したが、これは「早瀬の周辺域」を指し、「ロシアの言葉」である「ストルクン」の意味(小さな

- 早瀬) から大きく離れる。この問題を避けるために、R・エクブロムはスラヴ語の地格を示す前置詞「na」がギリシア語転写の際に混入し、「Na-」という語頭が出現したのだと説明した [Obolensky 1962, p. 51 およびそこで挙げられている文献を参照]。もう一つの説明はメリンによるものである。彼女は接頭辞「na-」および接尾辞「-ije」からなる名詞が集合名詞の少辞形を作ることを論証し、「Ναστρεζή」に「小さな早瀬」の意味を与えている [Melin 2003b, pp. 53-54]。
- (69) この早瀬は現在のリシュニー早瀬、あるいはそこから6キロ下流のヴィリヌイ早瀬のどちらかと考えられている。「小さな早瀬」の意味に良く適合するのはリシュニー早瀬のほうである。これは第6の早瀬から15キロ下流に位置し、長さは右岸側で469メートル、左岸側で186メートル、高低差は40センチとされる [Obolensky 1962, p. 52]。
- (70) 「クラリオンの浅瀬 (πέραμα τοῦ Κραρίου)」。この浅瀬は第7のリシュニー早瀬から21キロほど(ヴィリヌイ早瀬から15キロ) 進んだところにあるキチュカスと呼ばれる場所に同定されている。この直前で川は大きく南西側に曲がっており、キチュカスでは川幅が大幅に狭まって、現在では183メートルほどである。ファルクの研究によって、今日多くの研究者は「クラリオンの浅瀬」の本来の綴りが「πέραμα τοῦ *βραρίου」だったと推測している(古スウェーデン語「Vrār færia (屈曲の浅瀬)」: Obolensky 1962, p. 52; Rózycki 2014)。キチュカス付近では、9-12世紀に比定される集落の跡が見ついているほか、1928年に川底から10世紀の5本の剣が発見されている。これらの剣の産地は主としてノルウェーであったらしい。これらが戦闘中に失われたものなのか、偶然に落とされたものなのか、あるいはルーシの祭儀に関連するものなのか、はっきりとしたことはわからない [Duczko 2004, p. 251; Androshchuk 2013, pp. 122-123]。
- (71) キチュカス周辺から発見される大量の考古史料やDAIの記述、そして16-18世紀の旅行記などの記述から、この浅瀬が通商・戦略上重要な場所であり続けたことがわかる。10世紀におけるキチュカスは、ロシア訪問からの帰路にある「ケルソン人」と、ケルソンへ向かうドニエプル右岸在住のペチェネグ、そしてルーシが交わる地点であったとされる。Androshchuk 2013, pp. 122-123を参照。
- (72) コンスタンティノーブルの競馬場(ヒッポドロム)の内幅は約80メートル、観客席をも含めた施設全体の幅は約120メートルと推定されている [Belke & Soustal 1995, S. 83, Anm. 65]。
- (73) 「水底が顔を出す」。テキストは「友たちが見渡す (παρακύπτουσιν οἱ φίλοι)」の形で伝来しているが、このままでは文意をとることは容易ではない。「友たち」を競馬場のそれと解釈しつつこのテキストを維持する説もあるが [Cf. Belke & Soustal 1995, S. 84, Anm.66] テキストを修正する案としてはジェンキンスによる「προκύπτουσιν ὕφαλοι」が有力であり、本稿でもこちらを採用した [Obolensky 1962, pp. 53-54 を見よ]。
- (74) この箇所およびDAI, 9.47-55の記述は、DAI, 2.16-23におけるペチェネグとルーシに関する記述の基となっている。ペチェネグはキエフとコンスタンティノーブル間の交易路を常に脅かしうる存在であり、この路を利用するルーシにとってペチェネグとの友好関係は不可欠であったことが、DAI第2章および第9章の記述から示唆される [Cf. Obolensky 1962, p. 54]。

- (75) 「聖グレゴリオスの島」は、現在ロシア語でホルティツァと呼ばれる、キチュカスから数キロ下ったところにある島だとされる。この島の北部では、9-10世紀に比定される集落跡と土器類が発見されている [Androshchuk 2013, p. 123]。少なくとも16世紀末以降、この島にはコサックが住み着き、モンゴル人に対する監視所の役割を果たしていた [Różycki 2014, p. 133]。
- (76) 数々の難所を越え、この聖グレゴリオスの島でルーシたちは一時の休息を得る。そして彼らはここまでの無事を祝って祭りを行う。DAIで語られるこの祭りの内容は、ルーシたちの出自を考察する上で興味深い知見を提供している。Obolensky 1962, pp. 55-56のまとめに従えば、「樫の木」がスラヴ人の信仰において重要であった一方、生け贄の雄鶏(や雌鶏)は(北方の)ルーシの習俗に位置づけられる。またその他の要素は、両者に見られるものである。オボレンスキーは自身の解釈を提示していないが、DAIのここでの記述は、早瀬下りを行うルーシたちがヴァイキングかそれともスラヴ人かという二者択一を迫るものではなく、両者の文化的混交がすでに進んでいたことを示唆しているように思われる。早瀬下り後のこうした祭りは、後代のコサックたちにも受け継がれていた(17-19世紀の事例が確認できる: Obolensky 1962, p. 54; Różycki 2014, pp. 132-134)。
- (77) ペチェネグと会敵する恐れがあった早瀬や浅瀬を抜け、ここからドナウ川のデルタ河口の一部を形成するセリナス川(現在のスリナ川)に至るまでは、ルーシは安全に航行することができたとDAIは説明する。続く文章はその内容であるが、ルーシたちは彼らの丸木船を修繕し、比較的多くの休息を取るなど、確かに余裕のある旅程を組んでいるように見える。
- (78) 「聖アイテリオスの島」。この島は現在ドニエプル川の河口に位置するベレザーニ島を指す。長さ約900メートル、幅320メートルほどの小さな島であるが、すでに紀元前7世紀にはギリシア人植民市のポリュステネスが建設され、小麦交易で栄えた。紀元10世紀においては、この島はケルソンの人々の漁業拠点として利用されていたが、しばしばルーシとビザンツとの間で係争の対象になっている。944年のルーシ・ビザンツ条約では(第10条)、ルーシによるケルソンの人々への攻撃禁止、および聖アイテリオスの島での越冬禁止(秋には北方へと帰還すべきこと)が規定されている [『原初年代記』56頁]。Androshchuk 2013, pp. 123-125は、17世紀に作成された地図から判断してこの島が元々半島であった可能性を示している(とはいえ無論この説明は、10世紀当時のベレザーニ島が半島であったことを示すものではない)。この島では1905年にルーシ石碑を伴う墓が発見されており、そこではグラネという人物が彼の仲間であったカールを記念して石碑を建てたことが記されている。名前からしておそらく北欧の人物であるが、グラネはコンスタンティノープルへの往路のない復路において聖アイテリオスの島に立ち寄り、カールを吊ったものと思われる。この石碑は一般に11世紀のものだとされている [Duczko 2004, p. 252]。
- (79) ドニエプル川を指す。DAI, 42.66-67も参照。
- (80) ドニエプル流域の川の1つとされる。Obolensky 1962, p. 57を参照。
- (81) ドニエプル川の「支流」と訳した「παρακλάδιον」の解釈についてはObolensky 1962, p. 57を参照。
- (82) ドナウ川下流域は、ブルガリア王国の北側国境をなしていた(DAI, 37.48も

- 参照)。927年に王シメオンが死去しその次男ペタルが王位を継承して後、ブルガリアはビザンツに從属的となり[ブラウニング(金原訳)1995, 80-84頁]、ルーシたちの通行も比較的安全に行われたようである。KB(Лигаврин), стр. 328-329は、この通行許可が945/946年にブルガリアとルーシの間で締結された条約によるものと推測している。
- (83)「コノパス(Κονοπάς)」(あるいはコノパ[Κονοπά])の正確な同定はなされぬままである。既存の説はいずれも、ドナウ・デルタの内部に位置する島や村などにコノパスを比定している[Obolensky 1962, p. 57; KB(Лигаврин), стр. 329]。とはいえDAIの記述を素直に読むならば、コノパスの位置はセリナス川すなわちドナウ・デルタを遡ったところにある「ダヌピオス川の河口」、すなわちドナウ・デルタの起点から、南方の「コンスタンティア」(現ルーマニア、次註参照)までのどこかのはずであり、既存の説を採用してドナウ・デルタに再び戻るといふ想定は成り立たないように思われる。
- (84)「コンスタンティア(Κωνσταντία)」は現在のルーマニア、コンスタンツァに相当する。941年にルーシがビザンツを攻撃した後、ロマノス1世は黒海防衛における海上戦力の再編を行ったが、その一環としてコンスタンティアの港が整備されたことが推測されている[Madgearu 2013, p. 23]。
- (85)「バルナ(Βάρνα)」は現在のヴァルナに相当する。ここに流れ込む川は今日プロヴァディヤ川として知られている。なおこの箇所にはテキストに欠落が見られる。ジェンキンスに従って「コンスタンティアからは(και από Κωνσταντίας)」と補った。
- (86)「ディツィナ(Διτζίνα)川」は古代においてはパニユスの名で知られ、今日においてはカムツィヤないしカムツィクと呼ばれる。
- (87)「メセンブリア(Μεσημβρία)」は今日のネシェバルに相当する。シメオンの時代にはブルガリア領であったが、その死後再びビザンツ領に復帰したようである。10世紀におけるメセンブリアについては史料証言が少なく、詳しいことは分かっていない[Soustal 1997]。
- (88)この記述から、第9章の編纂時点におけるブルガリア・ビザンツ国境がディツィナ川とメセンブリアの間にあったことが想定される。彼らルーシの船旅がコンスタンティノーブルではなく、メセンブリアで終わると説明されている事について、KB(Лигаврин), стр. 329やLitavrin 1992, S. 45-53は次のように想定している。すなわち乗組員の大半(漕ぎ手や戦闘員など)はメセンブリアで待機し、商人や使節のみがそこから首都まで向かったのであり、積荷はおそらくメセンブリアでより大きな船に積み替えられたのだろう、と。実際、例えば『原初年代記』にみえる944年の条約では、コンスタンティノーブルに滞在できる商人は50人までなどと規定されており、ビザンツ側が帝国内におけるルーシの行動に神経を使っていたことが示唆される。
- (89)この文章より先(DAI, 9.104-113)は、異なる情報源から編纂された部分とされる(オボレンスキーの区分によれば「(B)」。詳細は上記研究動向(2)を参照)。
- (90)「Κίαβον」キエフの異綴り。DAI, 9.8および9.15を参照。
- (91)「巡回」と訳したこの語「γύρα」がいかなる語形・意味であるのかかつて論争があったが、今日ではおおよそ上述の意味を持つ女性名詞単数形と理解され

る（その経緯については Obolensky 1962, p. 60）。オボレンスキーは論拠の1つとして、9世紀末に編纂された『エイサゴゲ』第7章第8節における用例を挙げている（行政官に対し不要に自らの場所を離れること、「すなわち γόρα」を禁じる）。補足しておく、この節は『新勅法』134.1を基にしているが、その記述は『エイサゴゲ』のそれより曖昧である（単に「地方を回る」と表現されている）。すなわち『エイサゴゲ』の編纂までに、「γόρα」という言葉で表されるなんらかの（巡回による）行政行為が帝国で行われるようになった、あるいは知られるようになり、その知識が『エイサゴゲ』における詳細な記述に繋がったのかもしれない。次註で説明するように、DAIにおいて「γόρα」は「巡回徴貢」を意味するポリュディアの同義語とされている。

- (92) 「ポリュディア (πολύδια)」はルーシの「ポリュージェ (poliud'e = 巡回徴貢)」の音写であるとされる。これは首長たる公によって行われるもので、民からの徴税、各地における行政・裁判等を含んでいたとされる。ルーシ側史料において同時代における同じ慣行の例を示唆するものとして Obolensky 1962, pp. 59-60 などは、944年に開始された、イーゴリのドレヴリャーネ遠征を比較可能な事例として挙げている（そこでイーゴリは殺害されることとなる）。これは『原初年代記』945年の項に述べられている。これについて栗生沢 2015, 726-727 (註87) 頁は、イーゴリの遠征の眼目が戦争行為にあったとして「巡回徴貢」の事例とすることに難色を示している。しかし彼は、DAIに記される「ポリュディア」の対象にドレヴリャーネ（ベルビアノイ）が明記されている事実（次註参照）を見落としているように思われる。いずれにせよ「ポリュディア」によって徴集された現物税（毛皮や蜜、鐵など）は、引き続き春から行われる次のコンスタンティノープル交易の品としても重要な位置を占めていたと推測される。ルーシによるポリュージェのより後代の事例については、栗生沢 2015, 653-655 頁を参照。
- (93) 「ベルビアノイ (Βερβιάνοι)」は早くから「デルビアノイ (Δερβιάνοι)」と読むべきと指摘され、今日の通説となっている [Obolensky 1962, p. 60]。これはすなわち『原初年代記』に現れるドレヴリャーネに相当し、DAI, 37.44 にも「Δερβλενίνους」の形で現れる。ドニエプル中流域の西方に住んでいたとされるドレヴリャーネについては、945年に自分たちの所へ来て過剰な税を徴集しようとしたイーゴリを殺害し、その後寡婦オリガに復讐されたとする話が『原初年代記』60-65 頁にある。これについては栗生沢 2015, 216-220 頁も参照。
- (94) 「ドゥルグビタイ (Δρουγουβίται)」は『原初年代記』に現れるドレゴヴィチに相当する。彼らはドレヴリャーネのすぐ北方に展開していたとされる。ところでギリシア語の「Δρουγουβίται」の名で呼ばれる集団は同時代の南マケドニアとトラキアにも存在していたが、両者の関係は詳しく分かっていない [ODB, vol. 1, pp. 662-663 を見よ]。
- (95) 「クリピツォイ (Κριπιτζοί)」は、DAI, 9.9-10 に現れたクリベタイエノイ（クリヴィチ）の異綴り。
- (96) 「セベリオイ (Σεβέριοι)」は『原初年代記』に現れるセヴェリャーネ（セーヴェル）に相当する。彼らはドニエプルの東方、デスナ川とセイム川そしてスラ川上流の流域に居を定めていた。
- (97) この他の集団については、『原初年代記』第1章に幾つか言及がある。また

Obolensky 1962, p. 61 も参照。

- (98) ここで「給養」と訳した動詞「διατρεφόμενοι」と同様の意味を持つ言葉が『原初年代記』1018年(163頁)、1069年(198頁)の項にあらわれる。また、イブン・ルスタは「ルーシはスラヴ人の土地から運んできたものだけで養われている」と述べている。ガルディジーにも類似の記述があり、従ってルーシの行方「ポリュディア」は諸公や兵の給養を伴うものであったとメリニコフとペトルヒンは述べている [КБ (Мельникова & Петрухин), стр. 331]。
- (99) 「ロマニア」は、ここではビザンツ帝国領域を指す。この言葉は時として「蛮族」と対比したときの古代ローマ文化圏も意味し得た [Dölger 1953, S. 77-79]。
- (100) 「ウズイ (Ούζοι; DAI 最古の P 写本では Ούζοι)」は、しばしば言われるような「オグズ (Oghuz) (ないしグズ Ghuzz) の同義語ではなく、むしろオグズの一支族である可能性が高い [Savvides 1993]。ウズイはカスピ海の北側を西進し、889年頃にペチェネグをヴォルガ川とウラル川の流域から西方に追いやった。これによって、黒海沿岸地域の勢力図に大きな変更が生じた [Moravcsik 1958, vol. I, S. 90-91 および vol. II, S. 228; DAI, 37.2-8 および当該註も参照]。DAI 第9章においてこの文章が持つ場違いな印象は繰り返し指摘されてきたが、この点については上記研究動向(2)を参照。

(東京大学大学院総合文化研究科博士課程単位取得退学／日本学術振興会特別研究員 PD／東京大学大学院人文社会系研究科学生)